

会長就任にあたって

大谷 肇

2023~2024年度の会長に選出されました大谷 肇でございます。70年を超える歴史を有する本会の会長に就任させていただくことは、身に余る光栄であると同時に、その重責に身の引き締まる思いでございます。

私は、故内山会長のもと、2020年度から副会長を拝命し、その後3年間同職を務めてまいりました。副会長に就任した当時、会員数の減少などに伴って本会の財政が危機的状況にあることが顕在化しておりました。これを打開するために、2019年に岡田会長のもと、「近い将来見込まれる会員数3000人でも対応できる学会の運営体制の構築」を目指したタスクフォースが発足、その後の内山・金澤・早下各会長のリーダーシップのもと、企画戦略会議及び理事会構成役員の献身的な努力の甲斐あって、改革が着実に進められてきました。具体的には、「年会・分析化学討論会の自主運営」、「Analytical Sciences誌出版事業の外部委託」、「ぶんせき誌の完全電子化と冊子体会員配布の取りやめ」などを実現してまいりました。こうした成果によって、財務状況も徐々に改善され、タスクフォース設置当時の大幅赤字から、現在では単年度黒字を計上できるまでになりました。

一方、2020年からの3年間はまさしくコロナ禍の3年間でもありました。2020年度初めに緊急事態宣言が発出された際には、他学会同様本会でも、分析化学討論会を始めとする諸行事は軒並み中止、事務局も事実上の閉鎖に追い込まれました。その後、近年の情報革命に基づくオンライン技術の導入が積極的に進められ、丁度私自身が実行委員長を仰せつかった第69年会が初めてのオンライン開催となりました。また、支部・研究懇談会主催を含めた各種講習会・セミナー等も基本的にオンライン開催となり、また事務局員の勤務形態にも在宅勤務が取り入れられました。さらに、理事会・企画戦略会議を始めとする諸会議はほぼすべてオンライン開催となり、その結果、特に遠方からの出席者の時間と労力の負担低減につながるとともに、旅費を中心とした会議費が大幅削減され、これにより本会の財政が改善する大きな一因ともなりました。その反面、オンラインだけでは十分な意思疎通ができないことがあったり、過度の在宅勤務が業務の停滞を招きかねないことも明らかになってまいりました。特に、本会の重要行事である年会・分析化学討論会はやはり対面でなければ十分な意見交換ができないことが改めて認識され、これを受けて昨年度の第82回分析化学討論会および第71年会は、それぞれの実行委員会のご尽力により、他学会よりも先駆けて懇親会開催を含めた対面開催が実現されました。ようやくコロナ禍の終息も見通すことができるようになった今、オンラインやリモートワークの良さは残しつつも合理的なルールに基づく効果的な運用を行うとともに、年会や分析化学討論会は従来通りの対面開催を基本にストリーミング配信なども取り入れた、発表者・参加者にとっても

より良い方法での開催を進めてまいりたいと考えております。

さて、これまで述べてきたような改革の実施によって、本会の財政基盤が改善しつつあるとはいえ、会員数の減少傾向は依然として続いており、危機的状況から脱したとは残念ながら言えません。やはり求められるのは会員数減少の歯止めから会員拡大への転換であり、そのためには会員にとっていかに魅力ある学会にするかが根本的な課題となっています。いうまでもなく、分析化学は学術における基礎を担うとともに、産業界の活動を支える基盤技術としての側面を有しています。にもかかわらず、本会における産業界所属の会員、特に個人正会員の占める割合は決して多いとは言えません。産業界の会員に向けて、これまでも年会における産業界シンポジウムなどが開催されてきましたが、アカデミアのメンバーとの連携が必ずしもスムーズには行われてはおりませんでした。近年、新たな試みとして、年会における産官学交流カフェや、関東支部を中心とした分析イノベーション交流会なども実施されており、これらを含めた産官学連携の在り方を再構築して、産業界の皆様にもメリットを実感していただき、会員、特に若手個人会員の増強を図っていききたいと考えております。

さらに、学術の融合・学際化がますます進行する昨今において、これまでは本会との直接的な関係が希薄であった諸分野における研究者を、いかに本会に取り込んでいくかも、本会活動の活性化の大きなカギを握っていると思います。分析化学は、環境科学、バイオ医薬学、材料科学、宇宙航空科学などあらゆる最先端科学においても重要な役割を担っております。こうした先端学術分野の第一線で活躍している研究者も何らかの形で分析化学とのかかわりを持っているはずで、本会からもこうした研究者に対して、ジョイントシンポジウムを企画するなどを通じて積極的に働きかけを行い、分析化学の魅力と必要性をアピールできれば、必ずや会員拡大にもつながるはずです。

これらに加えて、国際交流の推進も重要であることは言うまでもありません。昨今、主要論文数などを始めとする学術分野での我が国の国際競争力の低下がクローズアップされ大きな問題となっております。これを打開するための方策の一つとして、国際交流の充実が必要不可欠です。本会では、このところコロナ禍および財政基盤の脆弱性などの理由から国際交流活動が停滞しておりましたが、これらの制約が解消しつつある現在、国際交流の活性化にも改めて取り組んでいく所存です。

以上述べてきた本会活性化に向けた諸方策の実現は会長一人の力ではできるものではありません。本部並びに支部・研究懇談会の諸役員の皆様、事務局員の方々、さらには会員諸氏のご理解とご協力がなければ成し得ませんので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。